

---

# Steins;Gate 運命分岐のスーパーナチュラル

ノラウサギ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Steins;Gate 運命分岐のスーパーナチュラル

### 【Z-コード】

Z0010Z

### 【作者名】

ノラウサギ

### 【あらすじ】

鳳凰院凶真こと岡部倫太郎は謎の男と出会う。その日を境に彼の身の回りで様々な現象に見回れていくことになる。【海外ドラマ】*Supernatural*とシータインズゲートのコラボのような物です。若干、化物語っぽくなりますが化物語の人物は登場させるかはわかりません。更新は不定期になりますので暇潰し程度に読むことをオススメします】

## 悪夢序章のポルターガイスト（前書き）

登場人物の話し方が少しおかしくなっていますが温かい目で見てやつてください。それではどうぞ。

## 悪夢序章のポルターガイスト

この俺、鳳凰院凶真はいつものように蒸し暑いある日、秋葉原を歩いていた。歩いていたと言つても目的などなくただぶらぶらしていただけだ。

「今日も暑いな……」

今の気温は35℃、何もしていなくても歩くだけで汗が流れる。さつさとラボに戻つてドクトルペッパーでも飲むか。

「ん？」

ラボの前に見たこともない青年が立つていた。茶髪に白地に黒のラインの入ったTシャツ姿の奇妙な男だ。手には何やらメーターのような物を持っているが……

……まさか機関！？

奴らに俺の居場所がバレたのか…くそ…今の俺には対抗する為の武器もないぞ！？

「ねえ、そこのアンタ」

青年が俺に声をかけた。見知らぬ青年は持つてゐるメーターをラボの方へ向けたまま俺の顔をまじまじと見てゐる。

「アンタって何の人？」

ラボを指差す見知らぬ青年。一体誰なのだろうか？

「まあそつだが貴様は誰だ？」

「ああ、失礼。俺の名は神ヶ谷航かみがやわたる」<sup>かみがやわたらる</sup>ってか俺の名前なぞひつどもいい

「ひつでもいい？自分の名前を名乗ることより先にしなければならぬことがあるのか？」

「アンタ、こいつを出した方がいい」

神ヶ谷と名乗った青年ははつきりとそう言った。

何だ？新手の詐欺か？一体何なんだこの男。

「こいつになると必ず悪いことが起る」

神ヶ谷は表情ひとつ変えずにそう言つた。ひつせロイシは詐欺だろう。そう決めつけて入り口の前に立つ男を押し退けると階段を登つた。

「まあ念のために塩を用意しといった方がいい」

男の声が聞こえてきたが俺はそれを背にラボのドアを閉めた。

「あ、お帰りオカリソ」

まゆりが俺に気づき声をかける。ソファーに座つて裁縫針を持った手を動かしてくる。どうやらまたコスプレ衣装を作っている様だ。

まゆりの隣には『助手』<sup>ミスター・ラボ</sup>と天才少女牧瀬紅莉栖が何やら難しそうな厚い本を何やら難しい顔で読んでいる。ダルはパソコンの画面を向いたまま凄まじい速度でキーボードを打ち込んでいく。

まあ要はいつもと変わらない光景が俺の前に広がつてこいつ」とだ。

「これよつゝ、第87回円卓会議を開始するー。」

高らかに宣言するが3人の反応は薄い。しばらく沈黙が続いた後、最初に口を開いたのは紅莉栖だった。

「円卓なんてないだろ。それに一体何の会議をするつて言ひのよ?」

呆れた紅莉栖をよそに俺は一つの古びたパソコンを指差した。あれは先日俺がラボの下でブラウン管工房を営んでいた天王寺裕吾からもらってきた物だ。何かに使えるだろうと思いもらってきたのだがなかなか案が浮かばずこのパソコンをどうすべきかを話し合つたりだつたのだ。

「うーん、何にも使えなさそうなら捨ててもいいんじゃない?」

ダルの意見に紅莉栖もまゆりも頷く。ぐつ……物の価値観も解らん奴らめ……

「といひで岡部」

「何だ助手よ」

紅莉栖は助手とこう言葉にムツとすると、

「私はアンタの助手じゃない。そんなことよつ……」

何や、怪訝な顔をすると紅莉栖は言った。

「Jのラボに出入りするのは私たちだけなのよね？」

「何を言つ。当然ではないか」

「やう…… よね……」

その夜、俺は1人で例のパソコンを段ボールに入れて研究室のテーブルの上に置いた。結局捨てる事になつたため明日の朝、ダルと解体しようという話になつたのだ。

「ふう」

一息つくとソファーに腰を下ろす。とたんに脱力感を感じた。そろそろ寝るか……

۱۰۷

玄関の傍に段ボールが置いてあつた。誰かが置いた物だろうか？なぜか気になつた俺はゆっくりと立ち上がりのろのろと段ボールに近づく。

「これは……」

10

ない……

先ほど俺が置いた段ボールがなくなつてゐる。確かに置いたハズなのに……

不気味に思いつつ先ほどまで段ボールを置いていた場所に再び段ボールを置く。

何だ……」の感じ……

誰かに見られているような居心地の悪さ……

複数の人間がこの部屋にいるような気配……

あわてて後ろを振り返るが誰もいない。しかし何だ?「この妙な感じは?」

「遊ぼ」

聞こえた……! 研究室の方からはつきりと聞こえた……!

そう思つた瞬間、ラボの中にあつた物がガタガタといつ音をたてて揺れだした。電気がチカチカと点滅し、誰もいないのにパソコンの電源がついた。

「なつー?」

地震ではない。建物ではなく建物内の物が揺れている。しかもパソコンが突然、ついたのはどういうことだ!?

何だこれ……?

まさかポルター・ガイスト！？しかしそんな馬鹿な！？なぜこんな突然！？

「...」

突然、後頭部に痛みを感じその場に崩れ落ちる。痛む場所を手で押さえるとどろりとした感覚がする。手を見ると赤い液体が……

ヤバい

絶対ヤバい……！

目の前に誰かがいるような気配がある。こぢらを見ているのがわかる。

ガチヤ！

パン!

ドアの開く音がして、続いて渴いた音。目の前に感じていたぼんやりとした気配は消えて、はっきりとした黒い人影が見えた。俺はそ

れを最後に意識を手放した。

頭が痛い……。ズキズキする。どうやら横になっていたらしい。重い体をゆっくりと起こし痛む頭に手をやる。

「…………」

俺の頭には包帯が巻かれていた。気づくと田の前に男が座つて何かを当たつていた。力チャ力チャという音からして金属製の物らしい。男が俺に気づく。見たことのある顔だった。

「神ヶ谷……航？」

「よお、やつとお田覚めか。ちいと寝過ぎだな」

神ヶ谷の手にはショットガンが握られていた。俺はそれを見て不覚にも狼狽えてしまう。

「さ、貴様は一体何者だ！？やはり機関の命令で俺を殺しに来たのか！？」

俺の問いかけに神ヶ谷は溜め息をつく。どうも呆れてこらぬつだ。

「起きたと思つたらすゞれか？元氣いいねえ、若いつてのは素晴らしいことだね」

俺と歳の差があまりなさうなコイツに若いつて言われても……

「まあ、アンタを助けて応急措置までしてやつたんだから少しぶらい感謝してくれてもいいんじゃね？」

神ヶ谷はそう言つて立ち上がる。俺の手当てをしたのはこの奇妙な男らしい。包帯の巻き方はかなり雑であつたが助けて貰つた身で文句は言えない。件の神ヶ谷は窓の前で何かをしていた。

こちからでは神ヶ谷の背中に隠れて彼が何をしているのか見えないのだ。

「何をしていろっ？」

「何をついて……塩で線を引いているだけだよ」

「塩？」

確かにコイツは前にも塩がどうとか言つていたな……。しかし、塩が何だと叫ぶのだ？

「塩の中に靈は入ることができない。だから塩を撒けばある程度時間は稼げるのや」

呆れたよつて言つ神ヶ谷。しかし呆れたのはけつちの方だ……！

塩で靈と立ち向かう？どんな脳をしているのだ……！前提に幽靈が

いることになつてゐる時点でどうかしている。大体、何故コイツは  
すかずかとラボに入つてきてる！？

そんな俺の考えを読んだのか神ヶ谷はけたけたと笑うと、

「一つ聞く。アンタの仲間は何にも言わなかつたのか？」

「……？」

「俺がこの部屋の前を通つた時、凄まじい寒氣に襲われた。それで  
もアンタの仲間は何にも言わらず、いつも通りだつたのか？」

いつも通りだつたハズ……

いや、確か紅莉栖は違つた。

『このラボに出入りするのは私たちだけなのよね？』

確かにこいつ言つた。つまりそれは紅莉栖もこの異変に気づいていた  
可能性があるということだ。

「……もう戻つてきたか……」

「い、一体何の話だ？」

「いや～さつき奴等にえんだんをぶつ放してやつたからな。奴等怒  
つてるみたいだしちいと厄介だな  
えんだん？」

何だそりや？

俺の顔を見て俺の考えていることを悟つたのか神ヶ谷は説明した。

「これだよこれ。塩の塊をショットガンに装填して撃つ。意外と効果あるんだぜ？」

ジャキン！

神ヶ谷は塩の塊をショットガンに装填すると塩のラインを引いていなードアの方へと銃口を向ける。

突然、銃口の先に男の子の姿が現れた。どこから出てきたのか、そしてこの子は誰なのか、分からぬことだらけだったが一つだけ分かっていたのは目の前に立っているこの少年が人間ではないということだ。その少年の頭から大量の血が出ていた。

頭から大量の血が流れているその少年はゆっくりと近づいてきた。

パン！

神ヶ谷は容赦なくショットガンの引き金を引いた。少年は煙の様にフウツ……と消える。

「い、今のは一体何だ！？」

「なあアンタ！」

「アンタとは何だ！俺は鳳凰院凶真だ！」

「ああ、そうかい！なら鳳凰院！この部屋に最近持ち込んだ物で馬鹿に使い込んでる感じの物はどれだ？」

「そんなことを聞いてどうする！？」

「塩撒いて焼くんだよ！ちつたあ頭使いな！」

頭使つてもそんな答えは出ないだろうが今はこの男の四つこじを聞いた方がいいだろう。

俺はすぐに一つの答えに行き当たる。それはパソコンだ。ミスター ブラウンにあのパソコンを貰ったのは確か3日前だ。紅莉栖が異変を感じたのなら3日前から今日にかけての間ということになる。俺は確証を得るためにポケットから携帯を取り出すと紅莉栖に電話をする。

「紅莉栖！俺だ！聞きたい」とある。』

『どうしたのよ？そんなにあわてて。それに私の名前を普通に呼ぶなんて……』

『いいから答えてくれーお前は』』最近、ラボの中で誰かの気配や視線を感じたりしなかつたか？』

『何の話？』

『いいから呪へー。』

電話の向ひで「何よ偉そつ……」と呟く紅莉栖の声が聞こえた後、『したわよ。部屋には誰もいなかつたのに誰かに見られてる気が。でも、私の氣のせいよ』

やはりだ……

やはり紅莉栖は誰かの気配を感じていた。

『それはこつだー？』

『えつと……3日前だつたわよ。アンタが店長から古いパソコンを貰つてきた後だつたと思つ』

当たりだ……！

「わかった！」

俺は何か言おうとしていた紅莉栖を無視して電話を切ると、例のパソコンを探す。

「鳳凰院！できれば急いでくれると有難い！塩弾が底をつく前に終わらせてくれ…」

パソコンを見つけたがどうしたらいいか分からず困惑してしまう。

「どナ…」

神ヶ谷に突き飛ばされる。睨み付けると俺の田の前にショットガンが押し付けられていた。

「俺がコイツを処理してる間、お前は幽霊を俺に近づけるな

ショットガンの扱い方など知るはずがないがそんなことを言つている場合ではない。先ほど神ヶ谷がやつてこたよつて見よう見まねで弾を装填するとドアの方へ銃口を向ける。

フウッ！

俺の目の前に人影が映る。しかしそれは一つではなかつた。先ほど  
の少年を先頭にその後ろを多くの人間が一列へ近づいてくる。

パン！！

俺は何も考えずに引き金を引いた。というか考えられなかつた。目  
の前の現象を信じることができなかつたからだ。

先頭の少年と後ろの数名が消えるが次から次へと押し寄せてくれる。

「鳳凰院！ いやとなつたら鉄を使って何とかしろ！」

そんなことを言ひのならお前がやれよ……！

振り返ると神ヶ谷はパソコンを分解して何かを探していた。しかし、  
一体何をだ？

「…………」

ドサッ！

見えない力に体を押さえつけられる。余所見をしたのは迂闊だつた。

「……なつ！ 嘘だろ！？」

倒れて仰向けになる俺の目の前に先ほどの子どもの靈が笑いながら立っているのが見えた。その手にはハンマーが握られている。

冗談じやない…………！このままだと殺される！しかし体が動かない。  
くそっ肝心な時に…………！

無我夢中で手を伸ばすと左手に向かい固こめのが当たった。俺はそれをがむしゃらに振り回した。

フウツ

子どもの靈は突然姿を消し、体にかかつっていた謎の力も消えた。俺は急いで体を起こし、研究室の神ヶ谷に向かつて叫ぶ。

「お、おい！まだなのかー？」

「今終わらせるよ、つたぐひのせえな。じつて急がせたがるかな

あ  
」

神ヶ谷の手には真っ赤な紙が握られていた。彼はポケットからライターを出すとそれに火をつけた。

「ぱつ！」

紙が燃え上ると同時にこちいらに迫ってきていた霊たちの姿も燃え上がり、そして消えた。ラボの中は何事もなかつたかのように静まり返っている。

「あ～終わった終わった。ビッシュて秋葉原って所はやたらと幽靈が出たがるんだろうな」

神ヶ谷は解体し終わったパソコンの部品をまとめると鞄の中に詰め込む。

「ま、待て！お前は一体何者だ？」

俺は神ヶ谷に問いかけた。神ヶ谷は俺の顔を見てこやつとすると、

「まあ妖怪退治の専門家みたいなものかな。しばらへこの辺りをうろちょろしてるから何かあつたら声をかけな」

そう言つて神ヶ谷航はラボから出ていった。この男との出会いから俺の身の回りで超状現象スペナンチャラルが多発し、そして巻き込まれていくことになるのだが、この時の俺にはそんなことを知る由もなかつた。



## 悪夢序章のポルターガイスト（後書き）

読んでくださいありがとうございました。更新不定期になりますのでつまらない点も多々ありますが頑張ります。

次回、『幻想召喚のトリックスター』もよろしくお願ひいたします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0010z/>

---

Steins;Gate 運命分岐のスーパーナチュラル

2011年11月30日10時46分発行